

識別番号	L 3
研究課題	メキシコ革命の 100 年—歴史的総括と現代的意義
研究代表者	堀坂浩太郎（イベロアメリカ研究所前所長・外国語学部名誉教授）
共同研究者	岸川 毅（国際関係副専攻）マウロ・ネーヴェス（ポルトガル語学科・イベロアメリカ研究所所長）谷 洋之（イスパニア語学科）幡谷則子（イスパニア語学科）箕輪 茂（イベロアメリカ研究所準所員）尾尻希和（東京女子大学）
Summary	In relation to the Mexican Revolution an immense quantity of literature has been presented in the course of one hundred years since it erupted in 1910. It was once a politically polemic topic given that the political force which insisted to be its legitimate successor seized the power for a long time. However, the development of democratization in the country has permitted relatively more objective discussion on it. This research program, in which participated not only Mexicanists but also researchers specialized in Latin American countries other than Mexico, has explored the historical process of the Revolution and tried to reexamine its significance and implications for today's Mexico chronologically as well as cross-sectionally.

1. 研究開始当初の背景

本研究は、本学イベロアメリカ研究所所員を中心に組織した共同研究であり、日本学術振興会 2007～2009 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)に採択された（採択課題「メキシコ革命の 100 年：歴史的総括と現代的意義—国際比較の観点から」、課題番号 19401009、研究代表者：堀坂浩太郎）。本年、メキシコ革命はその勃発（1910 年 11 月 20 日）から 100 周年の節目に当たるが、それを契機にメキシコ現代史の最重要事項のひとつと位置づけられるこの事象を見直すことで、現代メキシコに関する包括的な理解への一助としたいというのが、本共同研究を企画したそもそもの意図であった。

メキシコ革命については、メキシコ国内はもちろんのこと欧米各国においても膨大な研究蓄積が存在している。メキシコ革命はきわめて多様かつ多面的な性格を有するものであり、研究が進むとともに、革命の一側面を取り上げてその史的展開や意義を詳細に記述・分析した研究、また地方史的な手法でミクロな視点から革命の一側面を微細に記録した研究が主流となってきた。これらの研究は、従来見落とされてきた細かな事例、さらにはナショナリズム史観的視座からは軽視されてきた側面に光を当てたものと評することができ、決して軽視できるものではない。

しかしながら、メキシコ革命の包括的理解という点に関しては、それがきわめて政治的ないし党派的イシューであり続けてきたこともあって、議論が限られてきたということが出来る。例えば「メキシコ革命」とは何であったのかについてはもちろん、革命がいつ終了したのかという基本的な論点についてすら、諸論が並列的に、ないしは一方的に述べられたことはあっても、学問的なコンセンサスが得られているとは言い難い状況であった。

メキシコでは「革命の遺産」を政治的資源としてほぼ独占してきた制度革命党 (Partido Revolucionario Institucional: PRI) が 2000 年に下野したことから、メキシコ革命の学問的

評価・解釈に際しての党派的呪縛は薄らいだ。このことから、本研究を開始しようとしていた時期において、メキシコ革命の包括的な理解を図るには望ましい環境が整いつつあったということができる。

2. 研究の目的

本研究は以下の諸点を明らかにすることを企図していた。

(1) メキシコにおける政策決定者が「メキシコ革命」をどのようなものとして捉え、またその名の下に何を実現しようとし、どのような社会の建設を構想していたのかを、同時代的な文脈において理解すること。

(2) 国際比較の観点を導入し、メキシコでは革命を通じて対処しようとした各点について、他のラテンアメリカ主要国ではどのような対応がとられていたのかを把握すること。

(3) メキシコ革命が、特に米州各国にどのような影響を及ぼし、またどのような影響を受けていたのか、その相互作用を抽出すること。

3. 研究の方法

本研究は、政治学、経済学、社会学など隣接諸科学の方法論ならびに研究成果を活用しつつ、現地調査を中心とする地域研究の手法を用いて研究を推進してきた。その際に、とくに意識されたのは、以下のような諸点である。

(1) 現地主義に基づく地域研究の手法の重視：現地の図書館・文書館等における資料探索、現地専門家へのインタビュー調査、フィールドワークなどを積極的に実施した。

(2) 国際比較手法の重視：本研究の特徴は、メキシコを主な研究対象とする研究者のみならず、同国以外のラテンアメリカ諸国を専門とする研究者、さらには比較政治学の分野でメキシコと域外諸国との比較を長きにわたり行ってきた研究者が共同で参画した点である。個別に行った研究の中間成果は、必然的に専門領域・専門地域を異にする研究者の間で討議されることになり、メキシコ革命認識の相対化に資することとなった。

4. 研究成果

本研究は、本年に勃発から 100 周年を迎えたメキシコ革命の包括的理解とその現代的意義の把握を目指したものであったが、その際に、メキシコ国内で議論ないし理解されているメキシコ革命像を把握することはもとより、南北アメリカを中心とする対外関係がメキシコ革命に与えた作用ならびにメキシコ革命が 20 世紀の世界の動向に及ぼした影響をも視野に含めることを通じ、より立体的なメキシコ革命像の構築を企図して研究が推進されてきた。本研究により、わが国におけるメキシコ近現代史の理解にひとつの貢献をなすことができた

考えられる。

本研究の最終的な成果は、2010年3月に刊行した図書（堀坂浩太郎、岸川毅編『メキシコ革命の100年 歴史的総括と現代的意義』上智大学イベロアメリカ研究所、2010年）として取りまとめられた。以下、同書の内容を要約する形で、本研究の到達点を紹介する。

序章「メキシコ革命とはどのような革命か」（岸川毅）では、まず「革命」という事象の政治学的定義に照らし、メキシコ革命の特質が抽出されている。それによればメキシコ革命は、その勃発から収束までの過程に関して見るならば、ラテンアメリカ地域で数少ない典型的革命である。若干「反独裁」的な色彩が強いものの、民族主義や社会改革など20世紀初頭の諸革命（ロシア革命、辛亥革命）との共通点を有していること、前記にも関わらず基本的には資本主義（ブルジョア）革命の系譜に属することも指摘された。またメキシコ革命の固有性としては、イデオロギー的・思想的な曖昧さが見られる一方で、精緻な統治機構を築き上げ、現代社会にも大きな影響を及ぼし続けているなど高い完成度を兼ね備えるという一見矛盾する性格があるとされた。このような理論的位置づけを踏まえ、序章では次いで先行研究動向と本書の視点・構成が要約されている。

第Ⅰ章「メキシコ革命の遺産：産油国メキシコに忍び寄る石油危機とその背景」（堀坂浩太郎）では、同国の基幹産業の1つであり、革命の「成果」の1つとして国有化された石油産業を題材に、「負の遺産」としての革命の現代的意義を論じている。国営石油公社（PEMEX）は、これまで連邦財政収入の4割を賄うなど大きな貢献を為してきたが、このことは同時に同公社の再投資の少なさを意味するものであり、また地下資源の国有を定めた憲法規定は、今後の開発に外資の協力を得られないことを意味している。2004年をピークに原油生産量が減少を始め、確認埋蔵量が10年を切る状況になった今、メキシコが革命の遺産をどのように捉え、昇華していこうとしているのかが問題となっている。

第Ⅱ章『『未完の革命』の成就：思想的『遺産』の復活としての政治的民主化』（箕輪茂）は、20世紀メキシコ史を今日から振り返ってみると、メキシコ革命の当初の目標であった「政治的民主主義の実現」が、革命党体制の終焉によって逆説的に達成されたと論じている。すなわち、政治的民主主義は、革命主流派により樹立された体制に受容されず、長く野党の座に甘んじていた国民行動党（PAN）によって継承され、その実現が主張され続けていた。しかし1970年代以降進行的選挙制度改革の結果、20世紀末に至って民主化が実現し、これがメキシコ政治を規定する原則として復活した。勃発時の革新的な主張が長く実現を見なかった「未完の革命」が、100年近くの時を経てようやく成就したものと捉えられるとしている。

第Ⅲ章「メキシコ映画に描かれた革命：描写から寓話へ」（マウロ・ネーヴェス）は、メキシコ革命を題材とする映画の性格が政治や社会の変化を反映して変遷する過程を明らかにしている。それによれば、革命の記憶も新しく、国家自体がまだ安定していたとは言えなかった1930年代には、政治的立場を明確にしつつ革命を描写した映画も許容されたが、革命党が権力基盤を確固たるものとし、映画産業のコーポラティズム化も進行すると、革命は理想化されたオフィシャルな側面から描写されることが多くなったという。60年代の革命映画は現実的な描写に回帰したが、革命という大きな主題よりも観客の共感を得られる英雄を題材にする道を選んだ。その後、80年代には経済危機から革命映画そのものが生み出されなくなり、90年代に復活を見るものの、革命は物語の寓話的な存在となり、ほとんど主題ではなくなった。

第Ⅳ章「革命後メキシコ経済における『米国モデル』の探求：『断絶』と『継続』を手が

りに」(谷洋之)は、「断絶」と「継続」をキーワードに、革命勃発以来 100 年間のメキシコ経済を通覧したものである。特に経済的な側面においては社会改革が重視されてきたため、カルデナス政権が終わった 1940 年を画期として革命が描かれることが多かったが、このほかにも数多く看取される部分的な「断絶」を意識しつつ、それらがいわば撚り合わさった「継続」の側面に重点を置いて長期的視野で眺めてみると、革命後、特に 1920 年代以降のメキシコ経済政策が、その時々政策決定者が「米国経済」と認識した姿をモデルとして策定されてきたことが読み取れると論じている。

第 V 章「メキシコと台湾における革命党体制と民主化：ヘゲモニー政党制の形成と解消をめぐって」(岸川毅)は、メキシコの革命党体制と台湾の国民党体制がともに革命闘争の後、ヘゲモニー政党制を組み込んだ一党支配型の権威主義体制へと発展し、数十年の安定期を経て、平和的で段階的な民主化を遂げた事実に着目し、その形成から解体に至る過程を比較分析したものである。そこでは、両体制がともに資本主義経済体制下の近代化と議会制民主主義の実現を目標としながら、革命党の圧倒的な権力のゆえにヘゲモニー政党制が現実的に採用されたという点で類似するが、その一方で歴史的条件や指導者の選択の違いから、ヘゲモニー政党制の導入の仕方や度合いが異なっており、これが両体制の民主化の様式の違いに繋がったとの分析がなされている。

第 VI 章「キューバのふたつの革命：1933 年と 1959 年」(尾尻希和)は、メキシコ革命とならび、ラテンアメリカ地域における典型的革命の事例として取り上げられるキューバ革命を扱っている。キューバ革命は結果として社会主義体制に発展し、革命政権もそれが反帝国主義や社会主義を目指すものであったと広く宣伝しているが、同稿はキューバの 1933 年革命と 1959 年革命が目指した政治改革および社会経済改革を分析し、両革命が議会制民主主義の復活と資本主義の枠内での社会経済改革を目指すという基本的には同じ目標を掲げていたことを明らかにしている。1959 年革命後の政治体制が社会主義化した過程は、革命を推進する勢力が当初想定していたのとは異なる政治体制が形成されたという意味で、メキシコの事例とも通じるものがある。

本共同研究は、メキシコ革命史を専門とする研究者によるものではない。しかし上で紹介してきたように、ここでは現代的事象を個々の研究者の問題意識から地域研究的手法で分析しつつ、それを歴史的過程の中に位置づけようとするとともに、積極的に地域内・地域間比較を行なうことで、逆説的にメキシコ革命とそれに続く時代を立体的に捉えることに成功したと考えている。

この最終成果に至るまでには、その中間成果の一部を上智大学公開講座の一環として(「メキシコ革命とは何だったのか—100 年の軌跡と展望—」、2008 年 10 月～2009 年 1 月)広く社会に還元し、その受講者からも有益なフィードバックを得ることができた。また 2009 年 6 月には日本ラテンアメリカ学会第 30 回定期大会において 2 つのパネル(「メキシコ革命を再考する」および「革命と現代のメキシコ」)を組織し、そこで中間成果発表を行うとともに、同僚ラテンアメリカ研究者との討議の機会を得ることができた。このように学界および社会一般に対し研究成果を問うたことで一定の問題提起を行うことができたと考えている。